

パイロットと管制官に学ぶ心理療法のエッセンス -心理臨床家それとも社会人に求められる特質?-

The essence of psychotherapy learned from the pilot and air traffic controllers.

Do the characteristics need for clinician or man/woman of the world ?

新潟大学大学院教育学研究科 長谷川明弘

はじめに

「パイロット」や「管制官」を切り口に、「心理療法」に関するテーマを提供します。多くの方は、これらの単語の関係にとっても奇妙に思われるかもしれませんが。今回は、心理療法に関する用語や解説などは一切載せません。また、できる限りわたしの考えの直接的な表現は避けたつもりです。というのは、これを読んでいるあなたがあなたなりに理解していただくことをわたしは望んでいるからです。表題に対する答えは、あなたの中から出てきたものとなります。そして、できる限りわかりやすい表現を心がけます。さあ、始めましょう。

パイロット

最近の航空機の離着陸は人間の操作によって行われていますが、いったん飛び立ってしまうとコンピュータの制御によって運航の自動化がなされています。だから、旅客機でも戦闘機でもパイロットの技倆^{ぎりょう}が出にくくなっています。パイロットはある程度の訓練を受ければ、それなりに航空機を操縦することができるそうです。ここでは、パイロット自身の個性が比較的現れる戦闘機のパイロット（戦闘機乗り）を取り上げます。

戦闘機乗りにとって最も重要なことは「先の状況を読むこと」です。もちろん飛ばす技倆が重要なことは言うまでもありません。戦闘機乗りは周囲の状況を即座に判断し、次の行動を決めます。その一瞬の判断で時には命を落とすこともありうるからです。戦闘機乗りもプロペラで飛んでいた頃のパイロットはさらに独特の飛行術をもっていました。第二次世界大戦で活躍したパイロットに坂井三郎という人がいます。坂井は出撃回数200余回、空戦時間2000時間で海軍の零戦を操り、敵機64機を撃墜した名パイロットです。坂井は「左捻り込み」という海軍飛行機乗りの秘伝を極めていました。坂井に対するインタビューのやりとりや秘伝の獲得の過程を読んでいると、どのようにして坂井が海軍きっての名パイロットと言われるまでになったのかに興味湧いたので坂井の著書にあたってみたら次のような文章が強い印象を与えました。

『戦闘機乗りは、どんなに多くの味方がいてくれても、最後に頼るものは、自分以外にはない。このように考えて、私は、自分の精神、智能、体力をその極限と思われるところまで、鍛えに鍛えてみた。それは、辛いことであったが、こうしなければ私は空中戦に勝ち抜くことはできないと思ったからだ。（「大空のサムライ」より）』

航空管制官

航空管制官は、航空機の位置や高度を考慮に入れて各航空機の間隔を調整する役目を果たしています。すべての航空機は、この管制官の調整なしには空を飛ぶことはできません。次に管制官へのインタビューを載せて業務を理解するのに役立ててもらいましょう。

『パイロットというのは劣悪な条件の中で仕事をしている人たちなのです。それを助けてやるというのが管制官の仕事なんです。（中略）パイロットは自分の周波数にいるのは、5分か10分しかいない。どんどん流していきますから。その間に、最初の交信で「あ、この人だったら大丈夫だ」という感じをパイロットに与えないと行けない。与えますと、パイロットは言うとおりにってきます、うまくやれば。ところが、「こいつ、ちょっと怪しいな」と思うと、パイロットが言うとおりに動いてくれない。「こいつの言うとおりにやっても大丈夫なのか」と、パイロットがもしも疑問を感じながら飛んでいるとしたら交通はうまく流れない。（「管制官の決断」より）』

職人として

ところで管制官はいろいろな状況に応じて、たくさんの「パターン」をもっているそうです。管制官は航空機の状況に応じて「たくさんあるパターンの中から一つのパターンを選び出す」ことをしているそうです。ある管制官のインタビューを次にまとめてみました。『管制に余裕がある場合にはいろいろな誘導法があります。そういうときには管制にも個性が出ます。しかしたくさんの航空機があると、管制方式にはほとんど同じになって、管制官の間で差がなくなります。（「管制官の決断」より）』ここで管制官は自分の流儀をもっている点で戦闘機乗りと同じともいえるでしょう。

また、非常に技倆がある管制官は、自分のしたこと（一機一機のコールサイン、それぞれの飛行状態、自分の出した指示）をすべて思い出せるそうです。坂井三郎も戦闘時の自機の状況や敵機の状況だけでなく味方機の状況を覚えており詳細に著書に記しています。つまり、ここでは経験を重ねていくと職種は異なっても同じような姿勢や能力が身に付いてくることを表しています。

CO-знание (サ・ズナーニエ) 愛知学院大学心理科学研究会 (1996), p62-64
ある意味で、この姿勢や能力は「職人技」とも表現できるでしょう。以下に東京大学工学部教授であった加藤寛一郎がまとめた「優秀な管制官の条件」と「坂井三郎の特質」を掲載します。じっくり読んでみると加藤も指摘しているように多くの共通点があることに気付くでしょう。

優秀な管制官の条件	坂井三郎の特質
積極性	合理性
先を読む能力	精神力
早口(あるいは口八丁)	持続する向上心
歯切れよく速く喋る	緻密な頭脳
頭の回転が速い	平常心
服装がラフであること	
将棋や碁が強いこと	
スポーツが得意であること	
「管制官の決断」より	「零戦の秘術」より

おわりに

中学、高校の学生の頃には、わたしは空港に頻繁に出かけていました。空港に行くと、今飛び立とうとする航空機の雄姿を見たり、そのエンジンの爆音を聞いたり、周りの緊張感を体中で感じたり、着陸してエプロンに向かうときの航空機のゆっくりとした動きの中のわずかな緊張感を味わっていました。大学や大学院に進んでからは、足を運ぶのは減りましたが、空港に行くときは、今でも楽しみにして出かけます。そこでは、航空機だけではなく航空機のクルーや整備員、スタッフの様子を見ることもできます。また、これから旅に出かけることに期待している人たちを見ることもできますし、旅から戻って安心して人を見ることもできます。さらには、売店で働いている人や清掃の係りの人のさりげない仕事ぶりに気づくこともできます。また、忙しく指示を出す管制官とパイロットたちのやりとりを航空無線を通して聞くこともできます。空港では、いろいろな人が当たり前のように暮らしている生活の一部を垣間みることができるのです。

参考資料

大空のサムライ 坂井三郎 光人社 1994
零戦の秘術 加藤寛一郎 講談社+α文庫 1995
管制官の決断 加藤寛一郎 講談社+α文庫 1996